

敬天愛人に憶う —長戸路総長を追慕して—

松 井 喜代司

1.

最近における日本政治の混迷ぶりにはいささか驚かされる。それにしても興味をそそるのは就任自体が意外とされた鈴木内閣の48.2%（読売新聞の調査）という支持率には首をかしげざるを得ない。何をするつもりなのかともわからぬ今の内閣への支持が三木—福田—大平という三代のどの内閣の発足当初より高いのは一体、どこに原因があるのか、正直いってその真意が掴めない。原因はいろいろあるであろうが無責任な言葉でいえば、首相自身のヌラリクラリとしたわけのわからない姿勢のさだかでない風情が、案外、平和的な生活順応型にうけとられて人気を呼んでいるかも知れない。しかし、その反面靖国詣りを提唱したり、改憲発言で紛糾をおこしたり、政治倫理を問われる閣僚がいて頭の正常さを疑いたくなるような問題が目立っている。これらに対する国民の批判もそろそろではじめているし、加えて増税なしの財政再建問題もかなりエキサイトし異常なまで高まっているが、果して解決されるであろうか。それも批判を通りこした嘲笑と同時にアキラメに似た溜息となって現われているように思える。——もちろんこの内閣は始めから短命であると噂されているが、サテ次回は誰か、ということになるとどうもこれといった名案もないらしい。

先日、あるところで数人の老学者たちと茶飲み話しをしたことがあった

が、談たまたま現下の政治状況にふれたとき、「どうもいまの政治家には失望する。戦後で大物といえば吉田、鳩山、池田、それに佐藤ぐらいなものではないか。田中、三木、福田、大平は大物クラスではない。——それにしても今度の選挙には驚いた。自民党の造反もあって不信任案を可決したものの内閣は総辞職せずに解散、総選挙の結果、自民が圧勝……首相問題でずいぶんくすぶっていたが、どこでねまわしをしたのかわからないうちに鈴木善幸が浮上し首相に着任したから恐れいった。まさかと思っていたことが実現したんで驚いたね。」とこんな話しに花が咲いて、「もし今頃明治維新で活躍していた人たちがいたらどうなっているんでしょうね。例えば伊藤博文、西郷隆盛、坂本龍馬、高杉晋作、木戸孝允、大久保利通等、そのほかにも傑出した立派な人たちが沢山いて、そんな人たちが現下の政治に対して悲嘆にくれているのではないか。」——と老先生たちらしく感慨をこめて話されるのを聞きいったが、むろんこのような勤皇的帝国主義的存在が今日復活されるべくもないし、またそのようなものが許されてよい筈もない。この3、4人の老先生としてもマトモにそんなことを考えていわれたのではあるまい。問題は政治の制度よりも人間の側にあるワケで、たまたま名前のあがったこれらの人たちの存在に言外の意味が批されていたように思いかえした次第である。ともあれ、この雑談の懐旧趣味云々は別としても、彼等の頭脳には今尚「ザンギリ頭を叩いてみたら文明開化の音がする」というほど急速に変貌していったドラマチックなわが国の発展ぶりが、超ウルトラ的な人物による政治力であるとの見識を残していることを発見した。私はこの政治談義のなかに西郷隆盛の名前がでてきたので一層感深きものを覚えた。西郷は維新の三傑だけあって大人物たるに相違ないとしても、周知の如く日本最初の陸軍大将であり、むろん本格的な政治家ではない。しかし愛国の至誠に燃えながら悲劇の人生を全うした西郷には筋の通ったもののふの道と思想的背景があった。故に今日のような政党政治の自殺的傾向すらみえる動乱の時期には、たとえ政治家でな

くとも結構思いおこされるだけの何ものかをもっているかも知れない。すなわち日本政治史上における幕末以来の多くの保守政治をみるとき、ある程度まで薩長の政治が大勢に支持されていたことは否めない。これは折角はじめかけている大仕ごとを逆転しないようにするのが必要だと思ったからに他ならない。故に国内的には天皇の意志をふりかざすことによって、あらゆる政治的敵対者を攻撃することができた。しかし時代の趨勢に伴い西洋文明が輸入されるや、今までの保守的政治の国家理性のなかに焼きついた図式は許されなくなってきた。「大日本帝国」の発展と興隆は明治以来、東洋道徳と西洋芸術との使い分けの限界点に追いつめられながらも、天皇の存在を揺がすことなく元老や重臣たちは明治新政府の独自性を樹立し右往左往しながらも国家の命脈を保ち、一旦緩急の時には天皇という切札にものをいわせ安泰を図っていったのである。こうした政治構想は時代なりに根強く培養され一本の筋論として通用していった。これは次元をかえてみればこの国政治の特質にからむ興味深い問題が蔵されていると思うが、こうした薩長政治のなかにあつての西郷はある種の非政治主義をその人格のシンにもっているように思えてならない。その意味からいえば西郷が征韓論に敗れたことは、いってみれば事志に反した失敗者であつたともいえよう。このことについては諸説紛々としており私の説くところではないので省略するとしても、西郷を貫いている一本の筋は己の節をまげずに絶えず天人一体観の境地を開拓していく「敬天愛人」があり、この思想は敬服するに価するものがある。たとえそれが古めかしいものにせよ、封建的といわれるようなものであつたにせよ、ともかくきれいな信頼のおけるものとして一般からもうけとられていたことは、あえて論及するまでもない。

故人になられた本学総長 長戸路政司先生はこの西郷南洲の「敬天愛人」を自己の魂魄とし、そのドグマを建学精神の要としている。先生が南洲に私淑し、いかに思慕したかについてはその著「敬天愛人」、「敬愛学園

四十年の歩み」(創立四十年記念論文)の第一章建学の精神を一読すれば理解できるが、私としても悲劇の傑人一大西郷が幾多の艱難辛苦の過程において終始一貫、敬天愛人を生涯の理想として生きぬいていった面影に彷彿たるものを感じている。その敬天愛人を教学相長し、教育の世界に一生涯を捧げながらよく臥薪嘗膽、堅忍不拔の気概をもって前進していった総長先生を回顧してみると、時代の事宜相違はあるにしても南洲と先生の精神的同似点を見出すことができる。そうしてみると南洲は先生の学外における師祖であり、敬天愛人の訓は師教ともいえるのである。

私は学業の傍ら趣味として詩道にいそしみ南洲の詩心にことのほか感動を覚え、そのいくつかを座右銘にしている。このたび記念追悼号を寄稿するに当って、「敬天愛人に憶う」というテーマを進んで選ばさせていただいたが、もとよりこのような論題は私ごとき浅学菲才の輩が徒らにものすべきではないにしても、かつて明治大学総長 故鵜澤総明博士に師事し、東洋政治学を専攻したために、この道にも多少の明目をもっているので局部的ではあるが瞥見することをこの際あえて御許しを乞うものである。

2.

五十年前、その頃の政界をザッと見渡してみると三菱財閥のチャンピオンといわれた加藤(高明)内閣から若槻内閣(短命)へ、そして悪名高き田中(義一)内閣―続いて不景気時代に登場したライオン内閣の浜口雄幸という政治変転史を想いださせるが、本学の前身である関東中学が千葉市に生ぶの声をあげて誕生したのもこの頃であり、先生の心労煩愁が如実に覗える。無名の一学舎の名が一ぺんに全国中に知れわたったのは甲子園大会に出陣したことにあるという。たしかに学園救護の一策として野球に目をつけたことはラッキーでありこのことに関してはその著、「創立四十年記念論集」の歩みのなかで先生ご自身が述懐しておられる。創立当初のこ

の地は『死んでしもうか、穴川へ出ようか、死ぬよりましだよ出るがよい』というように穴川地域は人の住む所ではなかった。短大学長 大橋主城先生が総長の霊前で悼しくも弔意を蒼穹に訴え痛哭し血涙を濺いでおられたが、その当時のことをよく知っている人たちは大橋先生の言葉のなかに、私立学校経営に対しての長戸路先生ならではの咬菜するものがあったことを感ぜずにはおられなかったであろう。「長戸路さんはあんな所に学校を建てて間違いになったのではないか」と蔭口されるほど辺鄙なところに学校を建設したのだが、その決意は固く一向に怯るむところはなかった。それもその筈である。先生が教育の業に一生涯通じて貫いていった精神的要素を分析してみると、敬天愛人に倚恃するものが大であったから、その心底にはつねに忍辱と根力と気慨の情熱が燃えさかっていたに違いない。

余談になるが、私は市内寒川の漁師町に生れ、当時は腕白ざかりであった。小学校卒業と同時に長兄に連行されて母方の実家がある登戸町に住むこととなった。穴川・黒砂・浜海岸などは登戸町の在所であったからこの辺で子供時代ずいぶん遊んだものである。昼間でも人通りが滅多になく、たまに附近の丘陵地を利用して兵隊たちが実戦訓練をしていたことを記憶している。風の日などはとくにひどく黄塵が舞いあがり目も開けていられない仕末。穴川に通ずる一本道の農道は凹凸がはげしく、細長く周辺には茫々とペンペン草が生い茂り全くわびしい所であったことを誰よりも知っている。当時はまだ官員サン時代が謳歌しており貧困の差も甚だしく、不景気風に煽られたせいか学校へ進学する者も少なかった。市内には千葉中、千葉師範（男女）、千葉商、千葉工、千葉女子、千葉女子商、関東中、淑徳女子だけしかなかった。県都である千葉市がこんな有様であったから、千葉県全般を眺望してみても解るように私立中学の存在は皆無に等しかった。従って市内に住む人一否そればかりでなく市街に住む人も県境の隅曲に居を構える人たちも子等の受験期には大変悩まされたものである。

子供が親の意思通り目的校に進学すれば問題ないが、世の中は仲々ウマくいかない。試験に外れて親に似ぬ子は鬼子であるといって棄てる訳にもいかない。賢親愚子の親子関係があるかと思えばその逆もある。そんなとき、親の煩慮をうけいれて不幸にして受験に外れた生徒たちを抱擁したのが先生であった。これは正しく先生の「愛人」精神でもあった。そしてどこへいっても関中のことを「長戸路さんの学校」といって大変親しまれていたことも子供心に知っていたので、私は「どんな人かな」と興味を抱いたことさえあった。特に私の生れた寒川町の漁師たちは野球が大好きで県大会がはじまると仕事も捨てて球場に繰り出し、その応援ぶりは狂気の沙汰であった。甲子園に出陣した選手には寒川出身者が多くいるので関中とわか町とは関係が深いことになる。私は関中出身者ではないがすくなくとも先生の人格をかい間みて、その偉大さに敬意を表していた。学校がどのように軽べつされても一向に頓着することなく、困惑している人たちを救済し、その都度慈悲の心をもって、どんな人に対しても同じように温く接し、劣等生という語弊があるが、世話のやける生徒たちを根気よく教導し将来に夢を抱かせしめたことは先生の徳行のしからしむるところである。現に私はこの年代に育った卒業生の多くが各面に亘って地域社会の一線で立派に活躍しているのを知っている。友人もいれば心安く交際している者もある。先生が第八章「西郷南洲を仰ぎ見よ」の項のなかに、愚直な子等に対して示唆を与えせしめている言葉を発見する。

ナポレオン、ペスタロッチ、ニュートン、ダーウィン等を例に掲げこれらの人たちは少年時代、すべて鈍物であり馬鹿扱いされたことを指摘し、「我が西郷も少年時代は鈍物の標本であったとそれぞれいわれている。かくのごとく、古今の偉大なる天才又は人物にして少年時代の鈍物であった例は多数ある。そこで思い出されるのは人間というものは実に神秘不可思議なもので、外部へあらわれない潜在能力が潜んでおるので、この潜在能力を巧みに力強く引き出された者は間違いなく卓越した人材となるので、

青少年の教育がいかに大事大切であるかを思い出される」と強調し、最終的には西郷の天人一体觀を力説鼓吹し、私学設立に当っての一念発起の心のことばで結んでいる。正に忍之一字衆妙之門であるといえる。

3.

京都の清水寺境内に月照墓前の作の詩碑がある。——大君のためには何か惜しからん薩摩の瀬戸に身はしずむとも——の和歌碑と南洲の亡友月照十七回忌辰の作の詩碑がならんでいるが、それをみると南洲の風格が偲ばれる。「相約して渕に投ず後先なし。豈図らんや波上再生の縁。頭を回らせば十有余年の夢。空しく幽明を隔てて墓前に哭す」の詩句は薩摩の海でかつての盟友と死を誓い投身自殺をはかったが奇跡にも自身のみが蘇生してしまった悔後の念と月照への追想がこめられている。時に安政五年のことであった。それからのち維新の大業を終えた明治七年、いつの間にか十七年の才月が流れてしまったことを痛恨回顧し、南洲は帰国して月照への供養を厚くいとなんだという。この詩はそのときの作であった。ただ私の胸中にいまだに去来するのは南洲の蘇生についてのことである。一旦死んだ者が生きかえるということは不思議なできごとであり、余程運気の強い人であるにせよ生きかえたということは正に夢幻泡影な話しであるといっ
てよい。蘇生への奇跡に富んだいくつかの例は時折聞かされているが、南洲のように愛国の至誠をたぎらし波乱万丈を繰り返しながら、王政復古という大目的に挺身しつねにその危機を克服していった英傑もすくなかろう。蘇生した西郷は月照とちがい武士であったから、生き恥をさらすことは武士にあるまじき振舞いであるとし切腹することが当然であった。当時武士の習いとして腹をかき切り一命を捨てるのが常識とされていたが、武士の面目をすてて切腹することをあえてしなかったところに問題点が残されている。これについては諸説紛紛。ともかく物議をかもしのを恐れた島

津藩は幕府の手前、西郷を死んだことにデッチあげ変名させて大島に流したことは明白になっている。「蘇生」について先生はその著「敬天愛人」でこう述べている。「この瞬間、西郷は何だか大いなる御手に支えられ天来の響きが耳に入って来た。いわゆる見えないものが見え、声なき声が聞こえて来た。正に天と出会ったと言われるべき瞬間で、ここに旧人は新人となり旧西郷は新西郷となり、人生の大転換をきたした。これ一種の奇跡ともいうべきものである。世にいうところの見神の体験と称するところであろう……」と述べ、鈴木大拙の文を引用しながらさらに注釈を加え、投海水死蘇生を追及し、これは天意神慮の高遠なる摂理より出でたものであると喝破している。やがて時移り文久二年、藩主島津久光の上洛に当り西郷は許されたが、ふとしたことから藩主と衝突し再び徳島に流され、ついで沖永良部島に移されてしまった。前の大島配流は幕府の探索より免れるための藩の温情によるものであったが、今回は明らかに罪人としての扱いで厳しい監視のもとで日々をくらし、衣食にもこと欠き死にひんするような状態におかれた。「死んだ気になれば何でもできる」と人はよく言うが死に直面するほどの経験なしに気に徹しきることはむずかしい。口ではナンとも言えるが実際行動にうつすことは大抵不可能なのである。しかし西郷は九死に一生を得ただけに至誠一貫、勤皇の大義に生きる精神を失わなかった。このことに関して先生は力説の筆を揮っているが、その心底に奮勁する動機をよみとることができる。(第五章「使命観」参照)。先生の「ほどばしるもの百首」のなかに——人死にて死なぬ真理を今ぞ知る君一代はわれを啓^し発^ちけり——とあるが、この三十一文字には私学建設当初にあっての生甲斐と男児の本懐を南洲から学びとったものであるといっても過言であるまい。ついで私は別の意味から天と西郷の出会いを論じてみたい。西郷は絶海の孤島、沖永良部島に流罪されいつ死刑執行せられても悔いなしと覚悟をきめ、その大丈夫たる気魄は凡人のはかり知るところでない。彼は毎時作是念の境地で日々を送っていたのであるが、この地に陽明学者で

あり詩人でもあった川口雪蓬に逢遇していることを忘れてはならない。これは西郷がさらに大きく成長し大西郷になっていく一つの糧となっている。すなわち西郷はこの川口雪蓬について一層学問を磨き詩をつくることを学んだのである。西郷が死にもの狂いで二年有半の才月を過し想いをねり苦しみながら、ただひたすら学問に専心し詩の探究の生活を通して生きぬいたことは、人間的に一大転廻していたことを意味し、「死生は天の賦与」という天の思想を会得したのも、「人を相手にせず、天を相手とす」という境地を開いていったのもおそらくこの期であったのではあるまいかと考えられる。彼の「獄中有感」の詩をみてみよう。——朝蒙恩遇夕焚坑。人生浮沈似晦明。縦不回光葵向日。若無開運意推誠。洛陽知己皆為鬼。南嶼俘囚独竊生。生死何疑天附與。願留魂魄護皇城——とあるがこれは人間西郷の魂を詠じた詩として名高く、この詩意には敬天愛人の思想が脈々として流れているのである。これは天道無親常與善人の真隨の詩でもある。

4.

それでは見神の場と化した孤島での生死を越えた南洲の天とはそもそも何であったかを東洋政治の思想的背景から探ってみよう。

天は東洋政治学上、徳治思想の第一要諦になっていることはすでに拙論「東洋政治の思想的特質」のところで述べておいたが、一体に東洋（主として古代における支那民族）では未開期のつねとして天地自然現象を「神」として見つめてきた。これは歴史上明らかになっている。故に名山・大川・風雨・雷電等も彼等にしてみれば凡て神であったのである。天はこれらの神々のなかにおける最高の神として尊敬されていた。それではその天とは何であるかを少し吟味検討してみる。われわれの眼に映ずる天はただ有形の青空に過ぎないが太古の支那民族は、単に有形の青空のみを目

して天とはしなかった。有形の青空の上に無形の神が存在するものと解釈し、その神を皇天・上帝またはつづけて皇天上帝と名づけ、万物はすべてこの皇天上帝によって造られたものとし、かつその支配をうけるものであると考えた。「天の視るは我が民の視るにより、天の聡は我が民の聡による」や「天命常なし、ただ徳を是れ助く」とあるが、要するに天を万物の根本——「万物の親」であるとみなしたのである。わかりやすく言えば天とは儒学の哲理における最後の帰着点であって万有の根源を表現するものであるとしたのである。つまり宇宙の万有は天の生ずるところであるから、天によって支配せられるものだとし、人はすべてこの理法に従って有徳者が天に代って人民を治めるものと観念させたのである。天の思想は膨大で尽くるところがないが若干顕著なものを挙げ参考に供したい。孔子はその宗教説に天に対する信仰を第一にあげている。天の信仰は支那の古俗であるから、古代の思想を祖述した孔子は深く天を信仰し「子罕篇」において天が識知を有することを明らかにしている。また「述而篇」には天が意志を有することを語っている。そうしてみると論語に現われている孔子の天は聡明な識知と強大な意志とを有する宇宙の主宰者であり、人格的唯一神でもあり得たことになる。われわれの知識及び意志は、天のそれに比すれば物の数ではないので、こうした観点から天命を畏敬していたことを知ることができる。「季氏篇」に「君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らず、而して畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る」との文を以てすれば、いかに孔子が天命に対して敬虔的な心をもっていたかを知るであろう。孟子は「天の命ずる、これを性といい性に率う、これを道と謂う」云々といい、明白に性の善なることを説きその心理的事実を基礎において、帰納的に性善を証明し天と王者の関係を結びつけている。これは生知安行を意味するものであり人間完成への教義でもある。子思は「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり」と述べ天の道は四時行われるものであり、そこから百物が生

じ、それは万古にわたって一息の差謬もないことを強調している。これは子思が誠を天の道としたもので、天道を人道の本原ときめつけ儒教の天人合一思想を明示したものといつてよい。墨子は支那人固有の拝天思想と鬼神の觀念とを結びつけて、これを道德律の基礎とし、天を万物の最高標準としている。従つて彼の説く天も孔子と同じく宗教的性質を帯びる主宰者であつた。すなわち天は万物を創造し上下を監督し賞罰禍福を与える全智全能の主宰神なのである。天の欲するものは義であり欲しないものは不義であるとし、天意に従つて義を行う者はつねに栄え不義を行う者は必ず滅び、これは個人にあつても国家にあつてもこの理は同じものであると説いている。春秋学者である董仲舒もまた同じく、天は万物を創成する造物主と述べ吉凶・禍福・賞罰等一切の万物は悉く天から生じてきたものであるが、その中でも特に天の眷顧の深いものが人間であるときめつけた。人間が万物の靈長である所以はその意味からいへば天の愛子であると述べ、最終的には天と人との間における感応を信じ、人が悪い行いをすれば天がこれを戒め、よい行いをすれば天がこれを賞するものとした。それと同時に人間の行為もまた天に異動を生ずるものと考えたのである。邵子は天人合一の境を以て至善とし、天人合一とは物我の冥合であると考えた。この物我冥合説には疑問をはさむ余地が多々あるが、要は情をもって性を蔽うものとし、情を除いて善なる本性を発達せしめることを道德上の理想としたのである。王陽明はその修為論において王学の三綱領の一つである「致良知」を究明し、実践的工夫を考えた。彼はそれを静的工夫と動的工夫に分別した。静的工夫とは静坐澄心のことをいう。ともかく陽明は知行合一を天人合一に直結するには人の心の在り方が問題であるとし、心は虚靈明覺なるものとして静坐澄心の必要を認めたのである。これは靈明の心で本有の光輝を発する方法として修為の一工夫を案出したものといつてよい。しかし陽明は静坐が心を収斂するに有効なことを認めたものの満足感を抱かなかつた。つまり当時、宋儒が静坐を説いたことによって多くの学者がこ

れを採用したために却って反揆的になり、動的工夫として事上磨練の必要を述べた。事上磨練とは実際の事物について精神を練磨することを意味する。心は静と動を兼ねたものである。世間との交渉を絶ち静坐して無念無想の境に入ることは心を収斂するに有効なことであるが、かくして得たる修養は事に拠して動揺を免れないから、さらに実際の事実について練磨しなければならないという。これは空漠たる静坐のみを重んじた当時の学風に対して好箇の刺激剤であった。陽明がいかにかこの動的修養を重んじたかということは、その生涯の行動がよくそれを証明しているところである。——こうしてみると南洲が沖永良部島の俘囚となって独り生を窃んで学問に専心し、敬天愛人の思想に没頭したのは、換言すれば静坐澄心の工夫にあったといつてよい。やがて幕末王政復古の錦の御旗の陣頭に立って怒濤の勢いで江戸城総攻撃を開始し、独力よく無血入城を果たした無心無欲の崇高の大精神とその行動は、事上磨練の動的修養の工夫から湧出したものといっても過言であるまい。

さて天についての考え方をいくつかの例を挙げて点滴したが、天の思想は儒教たると道教たるを問わずその思想の深奥には天に対する一種の信仰

敬天畏命の宗教観が潜んでおり、永いこと伝承されてきたことをわれわれは知っている。「天は時として宗教的な有為的人格神のようにみなされ、祭祀の対象ともされたがいずれかといえ、宗教性は希薄で宇宙人生をつらぬく根源的理法としての性格が強く、したがって一種の自然法としての規範性をもって正統的な中国思想のバックボーンとなってきた」ことはいなめない。

ここにおいて私は自然への随順を説く東洋道義の高い精神に、もし新たな歴史的な世界秩序の原理を求めんとする主張があるとすれば、充分深慮しなければならないことを警告したい。それは人間中心のイズムは自然との対立にその制限をもつがために、われわれは自然が人間のエトスに対して有する意義を深く考察することによって、却ってその制限を脱し得ると考

えるからである。すくなくとも儒者が人間と自然との対立を棄てて天に統一原理を見出した点は優れたものがあり、極めて示唆に富んでいるものがあるとしても、専ら自然への随順を説く天中心主義のエトスは人間の個性と自発的意志の創造性とを包容し得ない点で共鳴できないものがある。いわゆる天なるものは歴史を越えた形而上的原理に過ぎないのであって、歴史に内在し現実を動かす生ける具体的原理ではあり得ないのである。天本立場は人間中心主義に対立して天の原理を主張する限り、依然として一つのイズムなるを出ないものと思う。そこで私は視点を変えて天人合一を考えてみることにする。

人間中心の立場をとっている西洋と天中心の立場をとっている東洋とが相互の対立において、それぞれの制限をもつとすれば、真実のエトスはむしろかかる対立を越えた第三の立場に求められねばならないと思う。そこでこの問題はわが国の近世儒学者の間で、天人合一の問題として自覚的に論ぜられているものがあるのでこれを引用してみたい。山鹿素行は「自ら成れるものは天作也、人のこしらへ致すは人作也」であるといい、「天作と人作と相因って万物其の性を尽す」べきものであり、「自然と云うも当然と云うも少しの差異にして、本同一義也」と述べ卓越した見解をもっている。このような説は他にもあるが、天人合一のエトスは要するに日本倫理の伝統的精神のなかに埋没しているのである。これは自然と人間の合一境に道德の真実が捉えられており、自然の生命基体なくしては人間も倫理も成立せず、人間の精神的自発性なきところには歴史も社会も現われないことを意味づけているのである。そしてこのような天作と人作、成と作との合一の極致を歴史的現実的において示すものが、実は国家なのである。そうしてみると国家は一面、根源的な自然的生命たる種的基体を契機として含むと共に、他面最高の歴史的人倫態でもあり得ることになる。これはランケが「国家の精神は勿論神の息吹である。併し同時に人間の動力である」といった国家理論にも相似している。これについては論を避けるとし

でも大宇宙（天）の生命が小宇宙である人間にそのまま伝っていると信じてきた東洋人の最高道德―「孝」という一字に突き当らざるを得なくなるであろう。とくに「孝」を百行の本として考えたことには異論のないところである。この孝は老（親）と子という二つの文字を合作したものであって、それは上からみれば親が子を「愛」するという象になり、下からみれば子が親を「敬」する象になる。つまり親を敬することは親の生命の渊源である天を敬することになる。天を敬することと人―天からみれば凡ての人間は自分から生れた子に当る―を愛することは実存哲学的に相関している。南洲の敬天愛人の人生観は正しくこれに相当するものと信じたい。

5.

敬天愛人を生涯の理想として生きぬいた西郷は識見遠大、人格高潔で近世における英傑として高く評価するものがあるが、西南の役によって死後反徒としての賊名を負わされ悲劇の幕を閉じてしまったことは残懷にたえない。西南の役への導火線になったのは征韓論にあった。しかしこれはただ西郷個人の固執した自己主張でなく、国を憶う一念からの主張であった。当時岩倉や大久保が唱へた内治論にはそれなりの理由があったにしても、わが国が余りにも近隣のことに目をむけずひたすら国内の充実のみに気を配りすぎていた感がある。西郷と大久保はもとより薩摩藩士で同じ志をもった盟友でもあったが、明治維新の実現までそのおかれていた立場がちがうし、性格も武人肌と政治家肌の違いがあってその言動は正反対そのものであった。今日その当時を回顧してみると私はすくなくとも西郷の遺韓使論はアジア大陸保全政策のための先見先憂を意味するものとしてうけとめている。ともあれ征韓論に敗れた彼はいさぎよく官位をはなれ一人静かに故郷に還り、私学校を創設して子弟を教育し国家の有事に備えたことは言うまでもない。「大西郷の遺訓と精神」より引用してみると南洲の当

時における生活の恬淡さが覗える。「我家松籟洗塵縁。滿耳清風身欲僊。謬作京華名利客。斯声不聴已三年」という詩があるがこれはその時の心境を吐露したものである。そのうちに江藤新平の佐賀の乱、熊本の神風連の乱、長州の前原一誠の萩の乱が相続いでおこり、ついに西郷を思慕する薩摩武士——私学校生徒の蜂起によって、いわゆる西南の役が開始——「天子様の軍に刃向うことは出来ぬ。またとても勝つことは出来ぬ」と子弟たちを諭したが、結果においては薩摩軍の主謀となり城山の露と消えてしまった。西道僊作の「孤軍奮斗圍みを破って還る」の城山の詩は余りにも有名である。また南洲の「感懷」に「独り時情に適せず、豈聴かんや歡笑の声。羞を雪いで戦略を論じ、義を忘れて和平を唱う。秦檜遺類多く、武公再生し難し。正邪今那ぞ定まらん、後世必ず清を知らん」とあるが、おそらく地下の西郷の霊はいかなる感懷をもって現世を眺めているであろうか、察するに余りあるものがある。おそらく先生はこの詩情に痛く動静云為したに相違ない。その著において「西郷亡きあと立ち上って同志を集め、私学を復興させ大西郷の精神を復興させ、大西郷の精神を中心として敬天愛人を建学の精神とし、西郷を理想の人物と崇め仰ぎ、真剣に学園再興に努める者がなかろうか、もしそれが出来たならば今日世界のケンブリッジ、オックスフォード、ハーバード大学にも劣らないものができたに違いない」と強説しさらにM. I. T (マサチュセツチュ工科大学) を引用し、各面にわたって論弁している。

先生は学園への開眼はわが人生にあって、天即ちゴッドの無上命法の訓であるとしている。老子のいう「知人者智、自知者明也」である。「これ全く西郷の敬天愛人の感化であると自分だけは信じております」と卒直に告諭し、学園の大いなる発展を将来に期待し文を結んでいるが、このような先生の悲願達成への遺訓に対し、私自身震慙を覚える。先生は天国にあって——誰か来たって是非を問わんや——とわれわれに大きな課題を与えしめているようである。

参 考 文 献

長戸路政司先生著「敬天愛人」

「敬愛学園 40 年の歩み」

易経・詩経・書経「大講座」

拙稿「東洋政治の思想的特質」(千葉敬愛経済大学経済学会第 6 号)

新開長英著「人倫の哲学」

山鹿素行「謫居童問」

ランケ「政治問答」

三浦藤作著「東洋倫理学史」

宮瀬睦夫著「東洋哲学の根本思想」